

『差異と反復』の解析と再構成の試み(2)

ZAITSU, Osamu / 財津, 理

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / The Hosei University Economic Review

(巻 / Volume)

86

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

7

(終了ページ / End Page)

20

(発行年 / Year)

2018-06-20

『差異と反復』の解析と再構成の試み

—— 2 ——

財 津 理

はじめに

『差異と反復』の解析と再構成の試み—— 1 ——」（「法政哲学」第一三号）の「(一) 時間論の構造のラフスケッチ」において、『差異と反復』第二章の時間論の構造のラフスケッチを示しておいた。その三つの軸は、「一、時間の第一の総合・生ける現在」, 「二、時間の第二の総合・純粹過去」, 「三、空虚な形式としての時間」である。この時間論の美学的意味を、まず、ドゥルーズから聞いておこう。

「……美学的問題には、日常生活のなかへの芸術の組み込みという問題しか存在しない。われわれの日常生活が、消費物のますます加速された再生産に服従して、常同的なものにされ、規格化されているということが明らかになればなるほど、芸術は、われわれの生活にとりついて、われわれの生活からあの小さな差異を、……引き抜いてやらなければならない、……そして、戦争の徹底的に劣質な破壊の下に、さらに消費のいくつかのプロセスをも発見しなければならないのであり、……ひとつの世界の終末に向かうひとつの自由でしかない選別になろうとも、このうえなく奇妙な選別を持ち込むことのできる、怒りのそれ自身反復的な威力によって、《差異》が最後に表現されるために、この文明の現実的な本質をなしているもろもろの錯覚や欺瞞を美的に再

生産しなければならない。どの芸術もそれぞれ、瓦状に重なり合ったそれなりの反復技法をそなえており、この技法の批判的かつ革命的な力能は、われわれを、陰気な〈習慣の反復〔＝時間の第一の総合〕〉から深い〈記憶の反復〔＝時間の第二の総合〕〉へと、さらには、われわれの自由が賭けられている最後の〈死の反復〔＝時間の第三の総合〕〉へと導くために、最高の域に達することができる。」(注1)

どの芸術にも反復の技法がそなわっており、それは、習慣の反復〔時間の第一の総合〕、記憶の反復〔時間の第二の総合〕、死の反復〔時間の第三の総合〕である。ただしここで言われている習慣、記憶、死は、あくまでドゥルーズが言う習慣、記憶、死であって、それらについては、本論に続くはずの拙論において、それらが現れるドゥルーズの文脈のなかで問題にしよう。ともかくドゥルーズにおいては、芸術の技法は時間の構造と切り離せないと言ってよい。

(三) 第二章第一段落の解析——2 (注2)

第二章第一段落はこのように開始されていた。「反復は、反復する対象のなかでは何も変化させないが、その反復を観照する精神のなかで何かを変化させる。」

この「反復」は、いずれ論じるように、ドゥルーズ哲学におけるポジティブな意味での反復ではない。これは物理現象としての反復である。

そしてこの段落の後半では次のように言われていた。「……反復〔物理的反復〕は、……、対象のなかでは、すなわち〈AB〔たとえば、チック・タック〕〉という〈物の状態〉のなかでは、何も変化させない。そのかわり、或る変化が、観照する精神のなかに生じる。すなわち、或る差異が、つまり何か新しいものが、精神のなかに生じるのである。A〔チック〕が現れ

ると、いまや私は、B〔タック〕の出現を予期する。〕〔〕記号およびそのなかの言葉は、訳者が補ったものである。以下同様。〕

では、物理的反復を観照する精神のなかに生じる変化とは何か。この「変化」は、「差異」、「何か新しいもの」と言い換えられている。では、変化、差異、何か新しいものとは何か。以上の文脈からすれば、精神のなかに生じる変化、差異、何か新しいものとは、「B〔タック〕の出現を予期すること」、要するに「現在における未来の予期」であろう。幾度も「チック・タック」を聞いていると、「チック」が聞こえる現在において、まだ聞こえていない未来の「タック」をおのずから予期してしまう。

以上を踏まえて、第二章第二段落の読解に進もう。

(四) 第二章第二段落の解析

『差異と反復』第二章第二段落の各文章を切り離して改訳し(注3)番号を付けて考察してゆく。

時間の第一の総合——生ける現在

- ①そのような変化〔反復を観照する精神のなかにその反復が導き入れる差異つまり変化〕は、どうなっているのだろうか。
- ②ヒュームの説明によれば、互いに独立した同一のあるいは似ている諸事例〔たとえば、チック・タック〕は、想像力のなかで融合する。
- ③想像力は、ここでは、ひとつの縮約能力として、たとえば、〔古典的な写真機の〕感光版として定義される能力であり、想像力は、新たなものが現れてきても、以前のものを保持している。
- ④想像力は、等質な諸事例、諸要素、諸振動、諸瞬間を縮約し、それらを

融合して、或る種の重みをもった内的な質的印象をつくる。

⑤A〔たとえば、チック・タックのチック〕が現れると、すでに縮約されているすべてのAB〔チック・タック〕の質的印象に応じた力で、われわれはB〔タック〕を予期するのである。

⑥それは、断じて記憶ではなく、知性の働きでもない、つまり縮約は反省ではないということだ。

⑦厳密に言うなら、縮約は時間の総合をなしている。

⑧瞬間の継起は時間をつくらず、それどころか、時間をこわしてしまう。

⑨言い換えるなら、瞬間の継起は、時間が生まれようとしてはつねに流産してしまう点を示しているだけである。

⑩時間は、瞬間の反復を対象とする根源的综合のなかでしか構成されない。

⑪この総合は、互いに独立した継起的な諸瞬間の一方を他方のなかで縮約してゆく。

⑫このように、根源的综合は、生きられる〔体験される〕現在を、つまり生ける現在を構成している。

⑬そして時間が広がるのは、まさにその現在のなかにおいてである。

⑭過去も未来も、まさしく生ける現在に属している。

⑮すなわち、過去は、先行する諸瞬間がそうした縮約のなかで把持されているかぎりにおいて、生ける現在に属し、未来は、予期がその同じ縮約のなかでの先取りであるがゆえに、生ける現在に属している。

⑯過去と未来は、現在とみなされた瞬間から区別される〔二つの〕瞬間を意味しているのではなく、諸瞬間を縮約しているかぎりでの現在そのものの〔二つの〕次元を意味している。

⑰現在は、過去から未来へ行くために、自分の外に出る必要はない。

⑱したがって生ける現在は、その現在が時間のなかで構成している過去から未来へ進むのであり、つまり同じことだが、特殊から一般へ進むのである。

⑲言い換えるなら、生ける現在は、その生ける現在が縮約のなかに包み込

んでいるもろもろの特殊なものから、その生ける現在がおのれの予期という場のなかで展開する一般的なものへと進むのだ（精神のなかで生産された差異は、生ける未来規則をなすかぎりにおいて、一般性そのものである）。

⑩こうした総合は、どこから見ても、まさしく受動的総合〔哲学者フッサールの言葉〕と名付けるほかはないものである。

⑪この総合は、〔時間を〕構成するのだが、だからといって能動的な総合であるわけではない。

⑫この総合は、精神によってつくられるのではなく、どのような記憶にもどのような反省〔既存の拙訳では反復になっているが、反省が正しい〕にも先立って、観照する精神のなかでできあがるのである。

⑬時間は主観的であるが、しかしそれは、或る受動的な主観の主観性である。

⑭この受動的総合つまり縮約は、本質的に非対称的である。

⑮すなわち、それ〔受動的総合〕は、現在のなかで過去から未来へ進み、したがって、特殊から一般へ進むのであり、このようにして時間の矢〔天体物理学者エディントンの言葉〕を方向づけるのである。

（以上、第二段落）

以上の①～⑤は、第二章第一段落の要約になっており、そして②～④からすれば「縮約」とは、「互いに独立した同一のあるいは似ている諸事例〔たとえば、チック・タック〕を融合する」ことを指すと言えるだろう。こうして、精神のなかに「(いくつものチック・タックが融合した) 内的な質的印象」ができあがる。現在において、この「内的な質的印象」に言わば押されて「未来の予期」が生じるのである。

では、⑦の「縮約は時間の総合をなしている」とは、どのような事態をいうのだろうか。「総合」、「時間」とは何を意味するのだろうか。

ドゥルーズは、たいていの場合、言葉の定義をしなくて論述を開始する。こうなると読者は、ドゥルーズがいきなり使う言葉を、持ち合わせの知識で理解しようと努めるほかはない。ところが、読者の持ち合わせの知識でドゥルーズの言葉を理解しようとしても、何を言っているのかよくわからない場合が多い。

ところで、ドゥルーズには独特の論述スタイルがあり、私はそれを、ドゥルーズの表現を借りて「漸進的規定」と呼ぼう（注4）ドゥルーズは自分が使う言葉を、使い始めてからかなり後で、少しずつ規定していったり、言い換えたりしていく場合が多い。しかし、『差異と反復』という複雑な大著のなかで、一つの言葉が間を置いてところどころで規定されても、あるいは言い換えられたりしても、それらをすべて覚えておくのは、一般的な読者にとっては困難である。しかも、ドゥルーズの行論は極度に繊細であるので、極度に神経を集中して熟読しないと、その論旨を把握できない場合が多い。

さて、縮約は時間の総合と言い換えられたのだが、時間の総合とは何だろうか。

とにかく、「時間の第一の総合」の文章を熟読しよう。⑩では、「時間は、瞬間の反復を対象とする根源的総合のなかでしか構成されない」と言われている。この「根源的総合」が、⑳の「こうした総合は、どこから見ても、まさしく受動的総合と名付けるほかはないものである」における「受動的総合」である。時間が構成される根源的総合は、フッサールの用語で受動的総合と呼ばれている。そして、この「受動的総合」は、経験的なレベルにある「受動的総合」である（注5）。この「時間の第一の総合」は、「時間の第二の総合」および「時間の第三の総合」とは異なり、経験的な「受

動的総合」と言われている。「時間の第一の総合」は、経験的な受動的総合である。

∴

ここで、フッサールの『内的時間意識の現象学』における時間意識の分析を思わせる（が同一ではない）本論から離れて、日常生活の時間経験を筆者の観点から考えよう。われわれは誰でも、現在（今）を経験的にわかっていると思っ
ているはずだ。たとえば友人から電話がかかってきて、「今何してる」と尋ねられたとする。そのとき、私は「今」を定義できなくても、「今」の意味で迷うことはない。われわれは、直感的あるいは直観的に今を理解していると思っ
ているからだ。

たとえば、私が、部屋の中で受話器を取って、友人の話を聞いているとき、その話を聞いているあいだ、時間は経過しているはずなのに、その話は「常に今」聞こえていると思いつけている。しかも、私自身も部屋も「常に今」存在していると思っ
ている。

さらに私は、今だけでなく過去も未来もわかっていると思っ
ている。なぜなら、私が存在するこの「今」は過去でも未来でもないと思っ
ているからだ。今存在していると思っ
ているとき、同時に「過去に存在している」と思うことは、たいていの人間にはできないだろう。われわれはまた、存在しているこの今と同時に未来に存在していると思っ
こともできないだろう。

ところで、「時間」はどうだろうか。そもそもわれわれは「時間」という語で何を理解しているのだろうか。時刻、時間の量、経過（流れ）、未来の到来などだろうか。では、経過していると思われる「時間」の「流れそのもの」を直接感じることはできるだろうか。

たとえば、「緑色を感覚することができるか」という問いに、日常生活においては迷いなく答えることができる。大人はもとより、ある程度成長した子供も、視力あるいは色覚に障害がなければたいていの場合、「緑」と言われる色

をすでに見たことがあり、見たことのある緑色と緑色という名称が一致しているからである。感覚対象と、名称が対応しているからである。

しかし、日常生活においてわれわれは、「経過しつつある時間そのもの」あるいは「経過すること」を、緑色のように感覚することはできるだろうか。

たとえば、夕暮れ時に海辺に佇み、夕日が落ちるのを見ているとき、時間がゆっくりと過ぎてゆくを感じることができるかもしれない。しかし、見えているのは太陽の見かけの移動である。物体の運動を介して、われわれは、時間が過ぎてゆくように感じ、そう感じていると思うのだが、時間の経過そのものを、夕日の位置変化から区別して、緑色のように感じることはできるだろうか。おそらくできないだろう。にもかかわらず、われわれは、「時間が過ぎる」という言葉遣いをするし、時間の経過を感じているように思っている。

他方、ふだんわれわれがわかっていると思っている時間は、たいていの場合、数量的な時間である。たとえば到着するまであと1時間あるとか、退屈な講演が90分も続いたとか。しかし、1時間や90分を、始まる瞬間から終わる瞬間まで、その時間量つまり1時間、90分の全体を感じることはできるだろうか。もちろんできないだろう。

われわれが数量的時間を理解すると思うとき、実は数を理解しているのである。しかも、時計を介してである。時計を介して得られた1時間や90分のような時間は、実は数の観念である。そして、このような数量的観念から根本的に区別される持続そのものを論じた哲学者が、ほかならぬベルクソンである(『時間と自由』)。

時計を介さずに時間の経過を感じることもある。走る列車のなかで、窓の外に見える風景は絶えず過ぎ去るが自分は常に今存在していると思いつけている乗客の心に、不器用だった若いころの思い出が突然よみがえってきたとき、窓に映る現在の自分の顔を見て、あゝ、お前は何をしてきたのだと自分に問うことがある。そのとき、苦い感情のなかで時間の経過を実感する。この場合、物体の運動つまり位置変化を介して時間の経過を感じるのではなく、現在の心のなかの思い出に過去を感じて、時間が過ぎたことを理解するのだろう。現在

のなかの過去である。

また重篤の病人あるいは高齢者は、明日も生きていられるだろうかと思うこともあるだろう。現在の不安のなかの未来である。これも物体の位置変化の予想のなかで得られた未来ではない。

ところで、かつて日本人の多くは、明瞭な四季の変化がある自然の中で稲作農業に従事してきた。そのような日本人にとっては、言うまでもなく田植えと収穫の時期が重要である。彼らにとっての基本的な時間の観念は、周期的時間の観念であったことだろう。

だが、現代の日本人の多くは給与生活者である。テレビ等で毎日放送されている天気予報は、たいていの場合、農業従事者向けのものではなく、給与生活者向けのものである。今夜は冷えるのでコートが必要だとか、台風が接近しているので早めに帰宅したほうがよいとか。各種の統計を見るまでもなく、われわれは、視聴率稼ぎに全力を傾けるテレビ番組によって、日本の人口の大多数はすでに給与生活者であることを知る。

給与生活者の時間観念はどうだろうか。もちろん給与生活者といっても、その職業は様々であるし、生活の仕方も様々である。けれども、給与生活者の日常的な時間の観念は、農業従事者の周期的時間の観念とは異なっているだろう。では、周期的時間の観念つまり円環的時間の観念でないとするれば、直線的時間の観念を、給与生活者はもっていると言えるだろうか。

直線とは、数学的定義によれば、両端が閉じられていない無限に伸びるまっすぐな線である。だから、キリスト教に見られるような世界の始まりとその終わりがあるような時間の観念を、直線的時間の観念と呼ぶのは、厳密に言えば不適切であるが、いまは、ゆるい意味でつまり線分をも直線と呼ぶことにしよう。

さて、日本人の給与生活者の多くはキリスト教徒ではない。キリスト教の教義に染まっていない日本の給与生活者が、キリスト教的な時間の観念をもつ機会は少ない。けれども、給与生活者は、たとえば何日までに営業成績を挙げなければならぬといったような自分の業務の時間的制約から、比較的短い直線

的時間の観念をもち得るだろう。

だが、私も含めて彼らは、古くからの周期的時間の観念を失ったわけではない。周期的時間の観念は、退職して労働の現場から離れたとき、めぐる季節のなかで顕在化することもあるだろうし、同時に、年老いてなお見果てぬ夢を追いながら直線的时间の終末に怯えることもあるだろう。人間が経験的にもち得る時間の観念は、周期的時間か直線的时间かの二者択一で規定されることはない。

われわれはこれまで、時間、現在、過去、未来という言葉を使ってきたが、それらの言葉の意味はどのように関連するのだろうか。時間とは、過去から未来への一方向的な何らかの流れ、あるいは何らかの量だろうか、あるいは一定の時点から出発してその時点に還帰することだろうか。前者では、過去は過ぎ去って戻らず未来は良かれ悪しかれ常に新しい。後者では、過去は再び帰ってくるものであり未来はいつか見たものである。

いずれにせよ、時間そのものは、細胞を顕微鏡で観察するようには対象として観察することはできない。ところが、われわれは、時間という言葉の意味を明確に把握していないにもかかわらず、日常生活において時間を感じているつもりになっているし理解しているつもりになっている。しかし私は、このような日常生活の時間理解あるいは時間感覚は浅薄なものだと言いたいわけではない。そのような時間理解あるいは時間感覚があればこそ、時計の意味も理解できる。時計があって、ようやく時間理解あるいは時間感覚が可能になるということではない。こうした時間の理解、感覚は、潜在的に現在・過去・未来およびそれらの関係を含んでいる。現在・過去・未来は、人間精神の根源的カテゴリーである。こうした精神の根源的カテゴリーにそくしてこそ、日常的な時間理解あるいは時間感覚が可能になる。

∴

閑話休題、『差異と反復』における経験的な「時間の第一の総合」に戻ろう。再度「総合」から考察しよう。総合とは、何をすることなのだろうか、

あるいは何がなされることなのだろうか。

⑩では、「この総合は、互いに独立した継起的な諸瞬間の一方を他方のなかで縮約してゆく」と言われている。したがって、総合とは、まず、継起する個々の要素を累積的に縮約することつまり融合させることである。

⑪では、「このようにして、根源的综合は、生きられる〔体験される〕現在を、つまり生ける現在を構成する」と言われている。したがって、総合とは、現在を構成することでもある。

ただし、「～を構成する *constituer*」というドゥルーズの用いる動詞は、辞書的には「～をなす」とも読める。事実、この段落の文脈からすれば、総合が、その外に現在を成立させるのではない。総合それ自体は常に現在において継続する。したがって、⑫は「このようにして、根源的综合は、生きられる〔体験される〕現在を、つまり生ける現在をなす」と訳すことができる。

次に、ここで言われている「時間」とは何か。

まず、⑬では、「過去は、先行する諸瞬間がそうした縮約のなかで把持されているかぎりにおいて、生ける現在に属し、未来は、予期がその同じ縮約のなかでの先取りであるがゆえに、生ける現在に属している」と言われている。

たとえば幾度も「チック・タック」が聞こえてきて、現在「チック」が聞こえているとすると、精神のなかで縮約された過去の「チック・タック」がこの現在において同時に一種の短期記憶として把持されており、この現在における短期記憶が過去を示す。この意味で、過去は現在に属している。さらに、「チック」が聞こえている現在において、縮約された過去の「チック・タック」に言わば押されて「タック」を予期させられてしまう。そしてこの現在における予期が未来を示す。この意味で、未来は現在に属している。

以上の意味で、⑭が言うように、過去と未来は、現在の外にある二つの

瞬間を意味しているのではなく、現在そのものの二つの次元を意味している。

さて、⑬では、「したがって生ける現在は、その現在が時間のなかで構成している過去から未来へ進む……」とある。

問題は、「現在が時間のなかで構成している過去から未来へ」という文章にある。現在が時間のなかで過去と未来を構成する場合の、時間とは何か。この「時間のなかで」における時間は、現在・過去・未来とどのような関係にあるのだろうか。

もう一度、ドゥルーズの文章を読もう。

⑩時間は、瞬間の反復を対象とする根源的総合のなかでしか構成されない。

⑬そして時間が広がるのは、まさにその現在のなかにおいてである。

⑭したがって生ける現在は、その現在が時間のなかで構成している過去から未来へ進む……。

この三つの文章から、時間は根源的総合（受動的総合）のなかで構成される何かである、そして時間は現在のなかで広がる何かである、さらに現在が時間のなかで過去と未来を構成するということになる。

ところが、ドゥルーズは次のようにも言う。

⑫根源的総合は、生きられる〔体験される〕現在を、つまり生ける現在を構成する。

⑩によれば、根源的総合のなかで構成されるのは時間である。だが、この⑫によれば、根源的総合が構成するのは現在である。⑩の記述と⑫のそれは、齟齬していないだろうか。さらに、⑬によれば、時間は現在のなかで広がる。さらにまた、⑭によれば、時間のなかで現在が過去と未来を構成する。⑬の記述と⑭のそれも齟齬していないだろうか。

以上を理解するために、第二章の中頃から二つの文章を引用しよう。この二つの文章は、時間についての漸進的規定とみなすことができる。

「時間の第一の総合は、時間を現在として、だが過ぎ去る現在として構成する。」(『差異と反復 上』220頁)

「習慣の総合たる第一の総合は、……時間を、生ける現在として構成していた。」(『差異と反復 上』227頁)

この二つの文章から、「時間の第一の総合」においては、時間とは現在を意味すると言ってよいだろう。

こうした規定に基づいて、上記の第二段落の各文章を齟齬させないことはできる。けれども、同語反復に陥る。たとえば、⑬の「時間が広がるのは、まさにその現在のなかにおいてである」や⑭の「生ける現在は、その現在が時間のなかで構成している過去から未来へ進む……」のなかの「時間」を「現在」に置き換えて読めば、それらの文章が同語反復に陥り、ドゥルーズがここで「現在」と「時間」という二つの異なる言葉を用いた理由が不明になる。

『差異と反復』を巨大な齟齬のシステムとみて、この齟齬に生産的な意義を読み取ることは可能だろうか、あるいは『差異と反復』から齟齬を可能な限り消去することは可能だろうか。われわれ読者は、少くともそのいずれかの方向で読むことは可能である。われわれはまだ、結論を出さずに『差異と反復』を解析していこう。

(注1) 『差異と反復 下』(河出文庫) 323～324頁。

(注2) 本節は、法政大学法政哲学会「法政哲学」第一三号掲載の「『差異と反復』の解析と再構成の試み——1——」における「第二章第一段落の解析——1」に続くものである。

(注3) 改訳は、Gilles Deleuze《Différence et répétition》PUF, 2011に基づく。

(注4) 『差異と反復 下』65頁, 87頁参照。

(注5) 『差異と反復 上』(河出文庫) 225頁参照。

Analysis and Reconstitution in *Difference
and Repetition* —2—

Osamu ZAITSU

《Abstract》

The purposes of this essay is to elucidate a problematic point about “the first synthesis of time” in *Difference and Repetition* by analyzing each sentence in the second paragraph of chapter 2. “The synthesis” is the contraction; the synthesis contracts successive independent instants into one another. Then what does time mean? It is not clearly defined. First, time is constituted in the synthesis which operates on the repetition of instants. Second, the synthesis constitutes the living present; time means the present. However, Deleuze states “Time is deployed in the present”. Is the first synthesis of time a tautology? Or is it a process that involves some kind of productive “disparity”?